

平成29年度 島根県立出雲高等学校 第69回卒業証書授与式 式辞

翠色濃きこの鷹の沢に吹く風に、早春の柔らかな気配が感じられる今日の佳き日、島根県立出雲高等学校第69回卒業証書授与式を盛大に挙行できますことに、心より感謝申し上げます。

出雲高校第69期卒業生となる314名の皆さん、ご卒業おめでとう。
教職員を代表し、皆さんに心よりお祝いを申し上げます。

ご家族の皆さまにも、この晴れの日を共にと多数ご出席いただきましたこと、本当に嬉しく思っています。逞しく成長された姿に、感慨も一入のことと思います。めでたく今日の日をお迎えになりましたこと、心よりお喜び申し上げます。そして、この3年間、本校教育にお力添えをいただきましたこと、本当にありがとうございました。

また、PTA会長石橋慶様をはじめ、多数のご来賓の皆さまにご臨席賜り、卒業生の前途を祝福していただけますことに、厚くお礼を申し上げます。

さて、卒業生の皆さんが本校で過ごしてきた3年間は、どんな3年間だったのでしょうか。「人は渦中にあるときは、その本当の意味には気づかないもの」と言います。皆さんにとっての3年間の重みは、これから先の人生でこそ自ずと自覚されてくるものかもしれません。ただ、本校において、よき友人に恵まれハイレベルの文武両道を軸に、充実した日々を過ごしてきたことは、必ずや皆さんの今後の人生を支えてくれるものと思います。

特に、皆さんはこの3年間本校で、文科省指定のSSH・SGH事業に取り組んできました。中でも、課題発見・解決型の課題研究で忙しく過ごした経験は、皆さんの大きな財産となるはずです。

班で協議してテーマを設定し、一つの提案まで持っていく流れの中、班員とディスカッションを重ねて創り上げていく協働する力、文献調査やフィールドワークなどを通じて論理を構築していく情報編集力、提案を効果的に伝えていくプレゼンテーション力など、これからの時代に必要とされる力を磨いてきました。また、勉強と部活動の上に、課題研究を加えた忙しさの中で、時間を有効に活用する時間管理能力も向上したと思います。講演会のあとで講師に質問する質問力の高さには、われわれ教師も目を見張るほどでした。

これらの活動を通じ、出雲高校生本来の素直で誠実、そして優しいという優れた気質に加え、より逞しさが増してきたと感じています。それが、部活動の好成績にもつながってきていると思います。心も、身体も、そして知的にもタフであること。これは、皆さんに期待される地域・社会のリーダーとして、備えるべき資質でもあります。出雲高校で学んだことに自信を持って、それぞれの新しいステージに踏み出して行って欲しいと思います。

ただ、皆さんが次代を担う若者として生きていくこれからの社会は、急激な変化を遂げる先行き不透明な社会と言われます。グローバル化、高度情報化、少子高齢化など様々な社会課題が挙げられます。また、その中で今後の社会を大きく左右していく一つに、人工知能AIの存在があります。AIが、囲碁の対局でプロに勝利したり、あらゆる分野で存在感を増し、仕事のやり方や今後の職業さえ予測しがたくしています。

こうしてAIの重みが増し社会に影響を与えていく中、AIをうまく活用しつつ、一方でAIにはできない人間だけにできることが大事になってきます。AIにできない人間だけにできること。その一つは、問題自体、つまり「問い」そのものを発見することだという指摘があります。AIが、課題と膨大なデータを与えられて解を出していくのと違って、自ら問題意識を持って、問いを立てていくこと。それこそが人間を人間らしく、高みへと導いていくために必要なことではないか、という考えです。

また私が出逢った、島根出身の俊英に奨学金を給付する公益財団法人「祈月書院」の理事長安部明廣氏は、世に資する人材として大きく成長するためには、「考えることが大切。特に、何か難しい問いを立てて考えてみるのが大切だ」と、かつて示唆を与えて下さいました。

例えば、私自身は、学校教育の目標を「文化・社会の後継者たる自立した個人の育成」と定め、そのための教育のあり方を、大きな難しい問いとして考えてきました。また普段の授業でも、問いの立て方、工夫された発問こそが、生徒を深い学びへと導きます。

皆さんにも、何か大きくて少し難しい問いを立てて、それを自分のあり方の一つの軸にして考えて行って欲しいと思います。最近、漫画や復刻版がベストセラーとなっている吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』、これも一つの大きな問いの立て方だと思います。皆さんが課題研究で立てたテーマも掘り下げていけば、大きな問いとなります。

具体的な例として、皆さんはSDGs(エスディーゼーズ)(Sustainable Development Goals)という言葉を知っているでしょうか。人々が地球環境や気候変動に配慮しながら、持続可能な暮らしをするために取り組むための世界共通の行動目標のことで、国連に加盟する全193カ国が合意し、2015年9月の国連総会で採択されたものです。

○貧困の根絶 ○飢餓の撲滅 ○質の高い教育の実現 ○ジェンダー平等 ○再生可能エネルギーの利用 ○持続可能なまちづくり ○平和で包括的な社会の促進 など17の分野で目標、つまりそのためにどうすれば良いかという問いが立てられています。いずれも、グローバルで難しい問いですが、価値ある問いです。

このような、社会貢献につながる、人間にしかできない、そしてまた自分に合った自分に関心を持つ分野で、大きくて難しい問いを立てて考え、それを軸に行動を継続していくこと。これは、持続する目標、志と言ってもいいでしょう。それが自らを高みに引き上げ、本校が目指す地域・社会のリーダーとして貢献できる人材を生んでいくのではないかと、私はそんな期待を皆さんに寄せています。

ところで、この冬のピョンチャン・オリンピック。皆さんは受験期で、テレビ視聴も出来なかったかと思いますが、私は、限りない挑戦を続ける姿、弛まぬ努力を継続する姿に、何度も感動しました。そして、一つの挑戦の裏に、実に様々な「物語」があることを知りました。

本校は、この2年間「自立・協働・挑戦」をスローガンとして掲げてきました。一人一人が自立した個人として、他者と協働しながら、地域・社会への貢献につながる新たな価値の創造に向けて挑戦していこうというものです。この姿勢は、卒業後も是非持ち続けて欲しいものですが、挑戦のための、「不撓の努力」の継続をはじめとする「オリジナルな物語」を、皆さんがどう紡いでいってくれるか、楽しみです。

私は、「人生、意気に感ず」という言葉が好きです。これまで、ひたむきに努力する生徒の姿、生徒の成長を願って骨身を惜しまず努力される先生方、そんな姿に触発されて、自分も頑張らねばと思ってやってきました。ひたむきに努力する姿が人の胸を打つことは、どんなに時代が複雑に多様化していこうと、変わらない真実です。周囲が意気に感ずるようなひたむきさで、挑戦して行って下さい。

卒業生の皆さん、君達は3年間この鷹の沢の丘に建つ出雲高校に上ってきました。意気揚々と坂を上った日もあれば、しんどい思いを抱いて坂を上った日もあったらと思う。

「旗雲」。3年間、変わらず学年通信の題となった「旗雲」。入学後第1号の学年通信には、こう書いてあります。

「旗雲」とは、独立してそびえ立つ高い山の峰に、まるで旗をなびかせたようにかかる雲である。今、出雲高校に入学した69期生はこの山を登り始めたところだ。そして、目指すはその頂上にかかる旗雲。その一点を見つめて、今、スタートを切った。この先、どんな喜びや苦難が待ち構えているかはわからないが、ワクワクする出発である。

この「旗雲」の命名には、「まことに小さな国が、開花期を迎えようとしている」という冒頭の一文で始まる司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』が踏まえられています。これから君達が生きていく、予想も出来ないような変化を遂げるであろう時代の流動性を考えれば、それは、近代国家建設を目指して我武者羅に進んだ明治維新时期に似ているとも言えるかと思えます。小説のあとがきには、

彼らは、明治という時代人の体質で前をのみ見つめながら歩く。

上っていく坂の上の青い天に、もし一朵の白い雲が輝いているとすれば、

それのみを見つめて、坂を上っていくだろう。

とあります。

「旗雲」。これは君達を鼓舞するメッセージを込めたものでした。『坂の上の雲』のあとがきの一節は、日々、坂を上り、「雲むらさきに照りにほふ我らの出雲」。ここで学んできた君達に、まことにふさわしいものと言えます。

若者の歩む道は坂道であるのが常です。別れにあたり、君達に関わってきた教職員すべての想いを、この「旗雲」の一語に託し、どうか困難に負けず、前をのみ見つめながらそれぞれの坂を上って行って下さい。その坂の上には、きっと一朵の白い雲のごとき希望が輝いているはずです。平成32年に百周年を迎える我が母校出雲高校は、いつまでも皆さんを応援しています。

出雲高校第69期卒業生の皆さん、3年間よく頑張りました。ご卒業おめでとう。大きく「飛翔」せんとする皆さんの今後に、幸多かれと祈念し式辞と致します。

平成三十年三月三日

島根県立出雲高等学校長 飯塚 勝